

『エッセー』 1595年版の「実の妹」、1635年版

奥村 真理子

【キーワード】 モンテーニュ、『エッセー』、遺稿、グルネ、1635年版

はじめに

1635年、二つ折り判の『エッセー』が出版された。いわゆる〈グルネ版〉『エッセー』¹⁾の第9版であり最後の版である。

著者モンテーニュは生前最後に刊行した『エッセー』1588年版に死の直前まで増補修正を書き込み続けた。その遺稿の翻刻が友人ピエール・ド・ブラックと「義の娘」マリー・ル・ジャール・ド・グルネの尽力によって実現したのが1595年である。ところがこの1595年版のテキストには、現存するモンテーニュの手沢本〈ボルドー本〉にない増補文が幾つかあり、内容的には同様でも表現面ではかなり異なる増補文も多く、細かな修正に関しては数え切れないほどの違いがある。これらのことから、1595年版は夥しい数の誤りがあるうえに改竄まで施された疑わしい異本であるという説が20世紀のほぼ百年間支配的だった。だが近年は、1595年版の翻刻の元となった遺稿は、〈ボルドー本〉とは別の1588年版の本に、おそらく〈ボルドー本〉への書き込みより後に記されたものだと考える〈グルネ版〉再評価の動きが著しい。とはいえ、〈ボルドー本〉とは別の1588年版（および紙片）に書き込まれた遺稿、その「写し」および／あるいはグルネに送付された1595年版『エッセー』の原稿の具体的な事情に関しては、〈グルネ版〉『エッセー』を積極的に評価しようとする研究者の間でも諸説ある²⁾。

このように未だ謎が残る〈グルネ版〉の初版刊行からちょうど40年後に出版されたのが1635年版である。標題には次のように記されている。

LES // ESSAIS // DE // MICHEL, // SEIGNEUR // DE MONTAIGNE. // EDITION
NOUVELLE. // EXACTEMENT CORRIGEE SELON // LE VRAY EXEMPLAIRE. //
ENRICHIE A LA MARGE DU NOM DES AUTHEURS // CITEZ, ET DE LA VERSION
DE LEURS PASSAGES, // mise à la fin de chasque Chapitre. // Avecque la vie de
l'Autheur. // Plus deux Tables : l'une des Chapitres, & l'autre des principales Matieres. ³⁾

引用の出典と仏訳、著者モンテーニュの略伝、索引付きと謳っている。1602年版に始まり版を追うごとに増えていった付録が満載の本である。そればかりか幾つもの箇所、『エッセー』本文中の古臭くなった語が時代の好みに合うように置き換えられ統辞法も変えられている。1625年版

から始まったテキストの近代化が一層進んでいるのである⁴⁾。グルネは、販売戦略としてのこれらの付録にもテキストの変更にも反対だったが、出版業者の強い要請に従ってしまった旨、序文で読者に告げている⁵⁾。このように1635年版『エセー』は、目次とモンテーニュの「読者へ」と『エセー』の他にはグルネの序文と国王の出版免許状の抜粋しか付いていなかったシンプルな1595年版とは対照的に、数々の装飾に彩られた「バロック的」⁶⁾な本であるとともに、テキストの面では、1635年というフランス語の純化統制を目的とするアカデミー・フランセーズ設立の年を象徴するかのような版であり、17世紀フランスの文化的・言語学的風潮を反映していると言えよう。したがって、〈グルネ版〉『エセー』に疑惑を抱く研究者のみならず積極的に評価しようとする研究者ですら、この1635年版『エセー』のテキストを、近代化と、グルネ称讃の一節(II, 17)の彼女自身によるおよそ半分への短縮(彼女自身が序文で読者に知らせている⁷⁾)には言及するものの、あまり研究してこなかった⁸⁾ことは頷ける。

ところで、上に引用した標題中の「*exactement corrigée selon le vray exemplaire*」という語句は、この版で初めて使われた。それ以前の版における誤まりをこの版は真の底本に基づいて正確に訂正したと言うのである。しかしこれは、グルネが序文で読者に告げている語や統辞法の変更と矛盾していないだろうか。書店が本を売らんがために付けた宣伝文句にすぎないのだろうか。

また、グルネは同じく序文で、この1635年版『エセー』を1595年版とともに読者に推奨して次のように述べている。

*Sçache donc, Lecteur amoureux de ce divin Ouvrage, que les seules impressions de l'Angelier depuis la mort de l'Autheur t'en peuvent mettre en possession : notamment celle in folio, dont je vis toutes les espreuves : & celle-cy, sa soeur germaine.*⁹⁾

グルネが読者に推奨するのは、著者モンテーニュの死後ランジュリエ書店から出版された版(1595年版、1598年版、1600年版、1602年版および1604年版)、中でも彼女が全ての校正刷りを点検した二つ折り判すなわち初版の1595年版と、「その実の妹」*« sa soeur germaine »*であるこの1635年版だと言うのである。この文言にも次のような理由で疑問を感じざるを得ない。

『エセー』1595年版には数々の誤植が生じた。グルネは全ての校正刷りに目を通して誤植を訂正したばかりでなく、正誤表を作成し、さらに印刷終了後も訂正をペンで書き込んだ。また、「習慣について」の章に生じた大きな脱落は、差替えのキャンセルシートを印刷して補った。ただし、現存する1595年版の中でこのキャンセルシートが付いている本は限られているので、キャンセルシートで脱落を補ったのはかなり遅い時期、おそらくは多くの本が売られた後だったと推測されている¹⁰⁾。さらに、1595年版の出版後、グルネはモンテーニュの未亡人と娘に招かれてモンテーニュの城館に長期滞在し、城館に残されていた原稿¹¹⁾を参照して、「読者へ」の原稿が行方不明

になっていたために不正確になったテキストを訂正¹²⁾、その他の誤植も手書きで訂正した¹³⁾。このようなグルネの多大な努力によって誤りを訂正された1595年版の本に基づいて、第2版である1598年版が印刷されたのである。したがって、1595年版より1598年版のほうが正確なはずである。それにもかかわらずグルネは、1598年版を推奨版の中には入れるものの、1595年版のほうを特に推奨している。しかも、業者に強いられて語句や統辞法を変更せざるを得なかった1635年版を、「それら〔ランジュリエ書店から出版された5版〕の実の妹」« *leur soeur germaine* »と呼ぶのではなく、「その〔1595年版の〕実の妹」« *sa soeur germaine* »と呼んでいるのである。

本稿では『エッセー』1635年版が、語や統辞法の変更にもかかわらず、標題で「真の底本に基づく正確な訂正」を謳われ、グルネの序文で特に推奨する1595年版の「実の妹」と呼ばれていることを巡って、グルネの証言とテキストの両面から〈グルネ版〉『エッセー』について考察を試みたい。

Ⅰ. グルネの証言：修復と保存への強い願い

まず、1635年版『エッセー』に付されたグルネの序文、国王の出版免許状、リシュリユー枢機卿への書簡体献辞に表されたグルネの証言から、初版から40年もの歳月を経、すでに8版を重ねているのに、グルネがこの1635年版を敢えて刊行しようとした動機ないしは目的がどのようなものであったのか考察したい。

証言 1) 序文

グルネが『エッセー』に付した序文は一般に、モンテーニュの遺稿の初版1595年版に初めて掲載した〈長い序文〉と呼ばれるものと、1598年版で〈長い序文〉と差し替えた〈短い序文〉と呼ばれるものの二種に大別されている。1595年版における〈長い序文〉は、『エッセー』批判に対してこの作品を擁護しようとするグルネの熱意のあまり攻撃的な論調になり、世間の反発を招いてしまったようだ。それ故か、グルネはネーデルラントのジュスト・リプス（ユストゥス・リプシウス）宛ての手紙（1596年5月2日付け）で、序文を付したことを後悔している、貴国の業者が『エッセー』の新版を印刷したいと望んだ場合、この序文は、訂正したものを送らない限り決して印刷させないでほしい旨、記している¹⁴⁾。また、遺稿の第2版（1598年版）のために送付されたと見做される、プランタン＝モレトゥス博物館に現存するグルネによる多くの手書き訂正¹⁵⁾のある1595年版（〈アントウエルペン本1〉と呼ばれている）では〈長い序文〉が切り取られている¹⁶⁾。1598年版以後も、1600年版、1602年版、1604年版、1611年版には〈短い序文〉のほうが付されている。しかし〈長い序文〉は、若干の修正を施されてグルネ自身の著書『モンテーニュ氏の散歩』*Le Promenoir de Monsieur de Montaigne*の第3版（1599年刊）に再録された後、再び『エッセー』の1617年版、1625年版、1635年版に付された。ところが、これら3版における〈長い序文〉は1595年版のものとは大きく異なる。1617年版で大幅に書き換えられ、1625年版ではさら

に若干の訂正が加えられ、1635年版でもさらに訂正が加えられているのである。これらにおいては1595年版における攻撃性が影を潜め、冷静な論調になっている。したがって、1595年版における〈長い序文〉と、1617年版、1625年版、1635年版における〈長い序文〉は、同じ呼び名を与えられていても区別されるべきであろう。しかしながら、それでも、それらの根底にある、『エッセー』を世間の批判から守りたいというグルネの気持ちは一貫している。その決定版が1635年版における〈長い序文〉なのである。

さて、その〈長い序文〉1635年版には次のような文章が加えられている。

Les Libraires & Imprimeurs, que je sollicite il y a 7. ou 8. ans par tout de l'entreprendre eux-mesmes, comme on sçait, estoient sourds quand je leur proposois mes precautions, quoy qu'elles ne consistassent seulement, qu'à les obliger d'apporter à leur Ouvrage une juste correction. ¹⁷⁾

この文章から次のことが分かる。7、8年前から『エッセー』の出版を印刷出版業者に依頼していたこと。ずっとどこにも応じてもらえなかったこと。その理由は、グルネが「正確な訂正」を要請したことであること。そして、「正確な訂正」がグルネの唯一の条件だったこと、である。実際、1625年版『エッセー』のグルネによる序文の正誤表の後に、『エッセー』には正誤表が作成できなかったことを読者に謝罪し、死ぬ前にもう一度『エッセー』を、次こそは完全なものを是非とも刊行したいと三人称で述べる文が付記されている¹⁸⁾。

「正確な訂正」への願い、まさにそれこそが1635年版『エッセー』刊行におけるグルネの第一の目的だったのではないだろうか。

証言 2) 国王の出版免許状

1635年版の第2刷には、『エッセー』では例外的に、国王の出版免許状の抜粋ではなく全文が掲載されている。ここにはグルネの証言が第三者によって記されているのだが、彼女の第二の目的が読み取れる。すなわち作品の保存である。

[...] la Damoiselle de Gournay nous a fait remonstrer, que le feu sieur de Montagne luy ayant de son vivant recommandé le soin de son livre des Essais, & depuis son decez ses plus proches luy ayant donné toute charge de l'impression d'iceux, comme il est notoire : & plusieurs fautes enormes s'estans coulees en la plus-part des impressions, en sorte que tout le livre s'en trouve gasté, & plain d'obmissions & additions apostées, [...] Elle a desiré rendre ce devoir au public, & à la memoire dudit defunt sieur de Montagne, d'empescher que ce desordre n'arrive plus en l'impression dudit livre, qui est d'importance, comme

estant un oeuvre tres excellent, & qui fait honneur à la France ; [...] A CES CAUSES, desirans gratifier ladite exposante : & favoriser la bonne intention qu'elle a de conserver ledit oeuvre des Essais, & en la façon qu'il a esté composé par l'Autheur, sans qu'il y soit changé aucune chose qui le puisse corrompre ; [...] ¹⁹⁾

「幾つもの大きな誤植がほとんどの印刷物に入り込んで、本全体が損なわれ、脱落と追加だらけになってしまった」、このようなことが二度と起こらないようにしたい、それが、著者モンテニユから生前『エッセー』を託され、著者の死後その近親から『エッセー』の刊行を任された者としての義務を果たすことなのだと言ったとグルネが訴えた、と出版免許状に記しているのである。遺稿の初版から40年の時が経ち、すでに幾つもの版が出版されてきたのに、グルネが敢えて新たに『エッセー』を刊行したのは、多くの誤植によって損なわれてきたテキストを修復するとともに、「『エッセー』という作品を、著者が書いたままの形で保存する」« conserver ledit oeuvre des Essais, & en la façon qu'il a esté composé par l'Autheur » という義務感があったためだったと考えられる。

証言 3) リシュリユー枢機卿への献辞

1635年版『エッセー』には、出版助成の資金援助をしたリシュリユー枢機卿への書簡体献辞も付されている。日付は1635年6月12日、上に引用した出版免許状に記載された印刷終了日6月15日の3日前である。損なわれた『エッセー』の修復終了も間近となった時期と言えよう。ここにも『エッセー』を守りたいというグルネの強い願いが表明されている。

[...] preste de tomber dans le sepulchre, je vous consigne cét orphelin qui m'estoit commis, afin qu'il vous plaise desormais de luy tenir lieu de Tuteur & de Protecteur. J'espere que le seul respect de vostre autorité luy rendra cet office : & que comme les mouches ne pouvoient entrer dans le Temple d'Hercule, dont vous estes emulateur : ainsi les mains impures, qui depuis long-temps avoient diffamé ce mesme Livre, par tant de malheureuses editions, n'oseront plus commettre le sacrilege d'en approcher, quand elles le verront en vostre protection par celle-cy, que vostre liberalité m'a aydée à mettre au jour. ²⁰⁾

「墓に入ろうとしている」という表現はあながち単なるレトリックとは言い切れない。遺稿の初版刊行に尽力した時は30歳前だったグルネも、今や70歳目前。〈義の父〉の享年59を越えてから久しい。17世紀前半であれば、70歳前で死を間近に意識しても不自然ではない。そのように死が間近に迫った者として、長い間多くの酷い版によって『エッセー』を汚してきた「不浄の手」が二度と近づくことのないよう、今後は「私に委ねられたこの孤児」の「後見人かつ保護者」となっ

てほしいと、リシュリユーに庇護を求めているのである。

序文、国王の出版允許状およびリシュリユー枢機卿への献辞における以上のようなグルネの証言から、『エセー』のテキストを「著者が書いたままの形」に修復し保存することこそ、1635年版『エセー』刊行のグルネの動機であり目的だったと考えられる。だが、グルネはこの目的と、販売戦略の一環として当代の趣味に合わない語を減らすことや統辞法を変えるようにという業者の強い要請（おそらく、校正に経費が掛かる「正確な訂正」版の印刷を引き受ける代わりに交換条件の一つ²¹⁾）との板挟みになった末に、不本意にも業者の要求を呑んでしまったのであるが²²⁾。

II. テキストの修復

グルネは、「長年」« depuis long-temps », 「多くの酷い版」« tant de mal-heureuses editions »あるいは「ほとんどの版」« la plus-part des impressions »が、数多くの誤植によって作品を損なってきた、と繰り返し述べていた。モンテーニュの遺稿に基づく『エセー』は1635年版以前には、初版の1595年版以降、〈グルネ版〉を含めて20以上出版されている²³⁾。無論、遺稿に基づくとは言っても実際は直接にはではなく、すでに出版された本を基に活字を組んだだけの版が大部分を占める。しかも現代とは異なり、当時は著者のテキストに一字一句厳密に従わなければならないという意識は印刷業者には希薄で、単なる不注意や誤読による誤植のみならず、綴り字や句読点はもとより語句までも、気紛れにあるいは恣意的に変更する場合さえあった。この一般的傾向は、〈グルネ版〉以外の版のみならず〈グルネ版〉にも見られる。たとえば1625年版には誤植が非常に多い。〈グルネ版〉と呼ばれていても、必ずしもそれら全てにおいてグルネ自身が校正をすることができたわけではないことが推測できる。実際、グルネはランジュリエ書店以外から出版された1611年版、1617年版、1625年版を読者に推奨していない。また、第2巻第21章のタイトルが、1635年版の序文でグルネが推奨する版に入れていない1611年版のみならず、ランジュリエ書店から出版された1600年版 (p. 692) および1602年版 (同じく p. 692) でも、「Contre la faineantise」ではなく「Contre la fantaisie」になっているという杜撰な例さえ見受けられる。グルネ自身、1635年版の序文の、業者からの統辞法の変更に応じざるを得なかったことを述べる件で、「意味はいささかも変えることなく、おそらくは旧版における誤植から最悪の場合には職人の無頓着から生じたと思われる分かりにくさを取り除くためだけ」の変更を行ったと釈明している²⁴⁾。したがって〈グルネ版〉も、上に述べたようなグルネの嘆きあるいは苦情の対象に入っていたと考えられる。

では業者に強要された変更以外の点では、『エセー』のテキストは1635年版でグルネの願いど

おり正確に訂正されたのだろうか。だが、〈グルネ版〉『エセー』の1595年版翻刻の底本たるモンテーニュの遺稿も、印刷に付するためにグルネに送られた原稿も、今では失われてしまった（少なくとも発見されていない）のだから、文字通りの実証は不可能かもしれない。そこで、適宜〈ボルドー本〉を参照しつつ、九つの〈グルネ版〉についてテキストの異同を確認することにしたい。

1) 1598年版で脱落した2箇所

先に述べたように『エセー』1598年版は、グルネが多大な努力によって1595年版の誤植を手書きで訂正した本に基づいて印刷された。ところが、1595年版（pp. 62-63）における次の2ヶ所が1598年版（p. 94）において脱落している。

- (i) « *entreprises : Et* » の後、« *en faveur des vices publiques* » の前の、
« *nous advient ce que Thucydides dit des guerres civiles de son temps, qu'* »
- (ii) « *tres-dangereux.* » の後、« *Si me semble-il* » の前の、
« *Adeò nihil motum ex antiquo probabile est.* »

これらの脱落は1598年版に由来する全ての八つ折り判の版（1600年～1649年の19版）および四つ折り判の1617年版と1626年版に見出されるという²⁵⁾。確かに〈グルネ版〉に関しても、*Le Corpus Montaigne* に収録された版を確認したところ、1598年版（p. 94）、1600年版（p. 94）、1602年版（p. 94）、1604年版（p. 83）、1611年版（p. 88）、1617年版（p. 79）、1625年版（p. 79）の全てにおいて(i)も(ii)も脱落している。だが、1635年版（p. 74）ではどちらも訂正されているのである。

2) 1595年版と1598年版の異文：他の〈グルネ版〉および〈ボルドー本〉との比較

第1巻第1章から第1巻第23章について1595年版と1598年版のテキストの異同を調べたところ、非常に多い綴り字と句読点の違いは別として、およそ30箇所が異なっていた。それらについて、〈グルネ版〉とされるその他の版および〈ボルドー本〉における該当箇所を調査した結果、大部分において、1598年版～1625年版が同様であるのに対し、1595年版と1635年版が同様でありかつ正しいと見做され得るものだった。（「同様」という表現をするのは、綴り字や句読点が必要しも同じではないからである。）

そのような中で次の箇所がわれわれの目を引く。〈ボルドー本〉（EBと略記する）の該当箇所とともに比較してみよう。

(i) 1595年版における誤植

第1巻第19章（EBでは第20章）「哲学することは死を学ぶこと」« *Que Philosopher, c'est apprendre a mourir.* » における次の箇所は、それぞれの版において以下のようになっている。

EB, 29r^o) sans cet accident qui semble nous menasser le plus,
 1595, p. 40) sans cet accident qui semblent nous menasser le plus,
 1598, p. 59) sans cet accident, qui semblent nous menacer le plus
 1600, p. 59) sans cet accident, qui semblent nous menacer le plus
 1602, p. 59) sans cet accident, qui semblent nous menacer le plus
 1604, p. 53) sans cet accident, qui semblent nous menacer le plus
 1611, p. 56) sans cet accident, qui semblent nous menacer le plus
 1617, p. 49) sans cet accident, qui semblent nous menacer le plus
 1625, p. 49) sans cet accident, qui semblent nous menacer le plus
 1635, p. 47) sans cet accident qui semble nous menasser le plus,

動詞「sembler」が1595年版から1625年版までの全てにおいて3人称複数形「semblent」になっているのに対し、〈ボルドー本〉と1635年版は3人称単数形「semble」である。ここは「われわれをこの上なく脅かしていると思われるこの事件〔死〕がなくても」という意味であるから、当然3人称単数形が正しい²⁶⁾。グルネがあればほど労を惜しまず校正を行った1595年版でさえ誤植の見落としがあったということであろう。そしてその誤植が、印刷終了後も念入りに誤植をペンで正したはずの1595年版の本に基づいて植字印刷された1598年版に引き継がれてしまい、1625年版まで継承されてしまったのであろう。ところが1635年版では訂正されているのである。

(ii) 1595年版のキャンセルシートにおける誤植

すでに述べたように、『エッセー』1595年版では、「習慣について」の章に大きな脱落が生じたため、差替えのキャンセルシートを印刷して補った。ところが、その印刷し直したキャンセルシートで新たな誤植が生じてしまった。その一つが、脱落箇所を補うために活字を組み直した63～64ページとともに活字を新たに組んで印刷された69～70ページ中の、第1巻第23章（著者生前の版およびEBでは第24章）「同じ意図から生ずる異なる結果」« Divers evenemens de mesme Conseil. »(p. 69)における誤植« presenter »である²⁷⁾。ここは« representer »とすべきだったのである。事実、〈アントウェルペン本1〉では、グルネがこの誤植を手書きで« representer »に訂正している²⁸⁾。また、この誤植が生じた文には、前半で« representer »が使用され、後半で« presenter »が使用されているので紛らわしかったのか、以下に示すように新たな誤植が生じている。なお、1595年版の引用は、キャンセルシートのこのページを参照できなかったので、活字を組み直される前のテキストである。なお、記号 _ は、他の版のテキストでは句読点がある箇所を示す。

EB, 47v^o ¶ . は句読点の修正を示し、¶ が修正前、. が修正後)

Mais il est bien vray, que cette forte assurance, ne se peut representer bien entiere, & naïfve, que par ceux ausquels l'imagination de la mort, & du pis qui peut advenir apres tout, ne donne point d'effroy : car de la presenter tremblante, encore_ douteuse & incertaine, pour le service d'une importante reconciliation, ce n'est rien faire qui vaille

1595, p. 69 (キャンセルシートによる差し替え前のテキスト)

Mais il est bien vray, que cette forte assurance ne se peut representer bien entiere, & naïfve, que par ceux ausquels l'imagination de la mort, & du pis qui peut advenir apres tout, ne donne point d'effroy : car de la presenter tremblante_ encore, douteuse & incertaine, pour le service d'une importante reconciliation, ce n'est rien faire qui vaille.

1598, p. 104-105

Mais il est bien vray, que cette forte assurance __ se peut representer bien entiere, & naïfve, que par ceux ausquels l'imagination [I05] de la mort, & du pis qui peut advenir apres tout, ne donne point d'effroy ; car de la representer tremblante_ encore, douteuse & incertaine, pour le service d'une importante reconciliation, ce n'est rien ___ qui vaille.

1600, p. 104-105

Mais il est bien vray, que cette forte assurance ne se peut representer bien entiere, & naïfve, que par ceux ausquels l'imagination [I05] de la mort, & du pis qui peut advenir apres tout, ne donne point d'effroy ; car de la representer tremblante encore, douteuse & incertaine, pour le service d'une importante reconciliation, ce n'est rien faire qui vaille.

1602, p. 104-105

Mais il est bien vray, que cette forte assurance ne se peut representer bien entiere, & naïfve, que par ceux ausquels l'imagination [I05] de la mort, & du pis qui peut advenir apres tout, ne donne point d'effroy ; car de la representer tremblante encore, douteuse & incertaine, pour le service d'une importante reconciliation, ce n'est rien faire qui vaille.

1604, p. 92-93

Mas il est bien vray, que cette forte assurance ne se peut representer bien entiere, & naïfve, que par ceux ausquels l'imagination de la mort, & du pis qui peut advenir apres tout, ne donne point d'effroy, car de la representer tremblante encore, [93]

doutteuse & incertaine, pour le service d'une importante reconciliation, ce n'est rien faire qui vaille.

1611, p. 98

Mais il est bien vray, que ceste forte assurance ne se peut representer bien entiere, & naïfve, que par ceux ausquels l'imagination de la mort, & du pis qui peut advenir apres tout, ne donne point d'effroy, car de la representer tremblante encore, douteuse & incertaine, pour le service d'une importune reconciliation, ce n'est rien faire qui vaille.

1617, p. 88

Mais il est bien vray, que cette forte assurance ne se peut representer bien entiere & naïfve, que par ceux ausquels l'imagination de la mort, & du pis qui peut advenir apres tout, ne donne point d'effroy ; car de la representer tremblante encore, douteuse & incertaine, pour le service d'une importante reconciliation, ce n'est rien faire qui vaille.

1625, p. 88

Mais il est bien vray, que ceste forte assurance ne se peut presenter bien entiere & naïfve, que par ceux ausquels l'imagination de la mort, & du pis qui peut advenir apres tout, ne donne point d'effroy : car de la representer tremblante encore, douteuse & incertaine, pour le service d'une importante reconciliation, ce n'est rien faire qui vaille.

1635, p. 82

Mais il est bien vray, que cette forte assurance ne se peut (re) presenter bien entiere, & naïfve, que par ceux ausquels l'imagination de la mort, & du pis qui peut advenir apres tout, ne donne point d'effroy : car de la representer tremblante encore, douteuse & incertaine, pour le service d'une importante reconciliation, ce n'est rien faire qui vaille.

おそらくはグルネによる手書きの訂正のおかげで、キャンセルシートにおける誤植「presenter」が1598年版では「representer」に正され、それ以降も1617年版までは「representer」が継承された。ところが、1625年版では再び「presenter」に誤植された。また、上に引用した1635年版のこの箇所のテキストは *Le Corpus Montaigne* からの引用であるが、「(re) presenter」となっている。Sayce の調査によれば、1635年版で「presenter」に誤植されたこの箇所を、グルネが手書きで訂正しているとのことである²⁹⁾。確かに、フランス国立図書館のホームページで公開されているこのページでは行間に「re」が書き込まれている。おそらく「(re) presenter」は

それを表しているのであろう。他方、1598年版では« ne »と« faire »が抜けるとともに、文の後半の« presenter »が« representer »に誤植された。この« representer »という誤植はそれ以後の版でも引き継がれてしまい、*Le Corpus Montaigne* 収録の1635年版でも誤植のままになっている。もっとも、Sayceが行った数冊の本における幾つかのページの校合によれば、1635年版には活字の組み直しによる訂正が認められるということであるから³⁰⁾、*Le Corpus Montaigne*に収録された本とは別の本ではどうなっているのか確認できなかったので分からない。いずれにしてもこの箇所は、いかに『エッセー』の刊行が誤植と訂正の繰り返しであったかが顕著に現れた例だと言えよう。

われわれが行った調査は『エッセー』全体の10分の1弱という部分的なものではあるが、見出された異同の大部分において1635年版のテキストが正しく訂正されたものであることが確認できた。このことと、先に述べたように第1巻第19章の1598年版で脱落した2箇所が1635年版で40年ぶりに正しく修復されていること、1635年版にグルネ作成による『エッセー』のテキストの正誤表が付けられていること（〈グルネ版〉の中で『エッセー』のテキストの正誤表が付いているのは1595年版と1635年版だけである）、および1635年版の本に彼女の筆による訂正が数々書き込まれていること³¹⁾を考え合わせるならば、誤植だらけになってしまった『エッセー』を正確に訂正したいという、グルネの証言に表された動機ないし目的は口先だけのものではなく、テキストの変更を迫る印刷出版業者の販売戦略との板挟みになりながらも、実際に彼女は「正確な訂正」を第一の目的とし、実行すべく尽力したと見做してよいのではないだろうか。

Ⅲ. 遺贈の書：『エッセー』1635年版の原稿

読者はすでにお気づきだろう。前節Ⅱの1)において示した二つの脱落箇所のあるページも、2)の(i)および(ii)において示した1595年版と1598年版における異文の該当箇所のページも、1598年版、1600年版および1602年版（いずれも八つ折り判）が同じであり、1617年版と1625年版（いずれも四つ折り判）が同じである。これらの箇所に限らず、1598年版と1600年版と1602年版は、僅かな例外を除きほとんどのページにおいてテキストのページ割付が同じである。また、1617年版と1625年版の場合も、130ページからは少しずつずれていくが、129ページまではほとんどのページにおいてテキストのページ割付が同じである。いずれの場合も、前の版に倣って後の版のテキストのページ割付がなされて活字が組まれたことを示している。このことと、前節Ⅱで調査した異同の大部分において1635年版だけが1595年版の正しいテキストに直っていたことを考え合わせるなら、1635年版は、1600年版～1625年版のように前の版を原稿としてほぼ機械的に（ただし、不注意や誤読や恣意性による新たな誤植を発生させつつ、また1625年版ではテキストの近代化を

盛り込んで)活字を組んだのではなく、別の原稿に基づいたのではないかと推測できるのではないだろうか。本節ではこの点について考察したい。

1) グルネの遺言書

1635年版のリシュリユーへの献辞においてすでに死を間近に意識していたグルネだが、実際にはそれから10年生き長らえることになる。そして死の前年の1644年12月21日、最後の遺言書を作成した³²⁾。その中に興味深い一節がある。

[...] elle luy a mis en main presentement en un sac ou enveloppe de toile verte un vieil exemplaire des *Essais*, tous en feuille, le suppliant de l'envoyer à la premiere commodité avec la coppie de cet article du present testament au sieur de Lavie, avocat general à Bordeaux ville à laquelle il a bon accès. Cet exemplaire est la copie sur quoy elle a fait faire sa derniere impression desdits *Essais* de l'année mil six cent trente cinq en presence et soubz l'auctorité dudict sieur affin qu'il puisse voir et monstrier qu'ils ont esté bien observés par elle, [...] Il [Lavie] recevra par ce moyen le dernier adieu de sa bonne mère, Elle avoit cette alliance avec luy. ³³⁾

「義の息子」に遺贈されたこの「『エセー』の綴じられていない古い本」、1635年版『エセー』の原稿だった本は今どこにあるのだろうか。もはや失われてしまったのだろうか。それはどのような本だったのだろうか。

一つの推測が可能である。グルネは1635年版の序文で、モンテーニュの没後ランジュリエ書店から出版された版を推奨していたが、中でも初版の1595年版を特に推奨していた。それとともに推奨していたのが1635年版であり、しかも1595年版の「実の妹」と呼んでいた。したがって、1635年版『エセー』の原稿として遺贈された「綴じられていない古い本」は、ランジュリエ書店から出版され、グルネが印刷中に校正を行って活字を組み直させ、さらにパリとモンテーニュの城館で訂正を書き込んだ1595年版『エセー』の一冊だったのではないだろうか。本稿Ⅱで述べたように、1598年版～1625年版における脱落が1635年版では1595年版のように修復されていることと、われわれが行った1595年版と1598年版の異文に関する全ての〈グルネ版〉および〈ボルドー本〉の調査において、1635年版のテキストが大部分において1595年版のテキストに一致していたことが、この推測を裏打ちすると言えるだろう。

2) 綴り字 *ceste* の分布

この推測を決定的に証拠立てる特徴が1635年版『エセー』にはある。綴り字 *ceste* の分布である。1635年版には *ceste* が505回使われているが、そのうちの499箇所、すなわち99%が1595年版における *ceste* の使用箇所と一致しているのである。これは、1635年版の植字の際の原稿が1595年版

の本でない限り起こり得ないことである。

なぜならば、モンテーニュが〈ボルドー本〉の表紙の裏に記した印刷に関する指示のうち、具体的に綴り字を指示されている語についてわれわれが1595年版を調査した結果、1595年版における *cette* と *ceste* の分布にはこの版固有の特徴があることが見出されたからである。すなわち、第1巻全体と第3巻の前半の6割が同様の割合で、*cette* がほとんどを占めているのに対し、第2巻全体と第3巻の後半の4割が同様の割合で、*cette* と *ceste* が半々である。さらに、第2巻全体と第3巻の後半における *cette* と *ceste* のページごとの数を調査すると、若干の例外はあるが、ほぼ12ページ周期（部分的に6ページおよび4ページ周期）で、*cette* が支配的なページと *ceste* が支配的なページが交替している。このような分布と周期的交替は、1595年版の印刷工程に由来していると考えられる。1595年版は二つ折り判の挟み込み折丁で、原則として3枚折丁であり、ページ順の植字よりも印刷工程が速くできる composition « par formes »（組み版順植字）で植字されたと推定されている³⁴⁾。また、始めの2巻を一つのチームが印刷し、第3巻をもう一つのチームが印刷するという、2チーム同時進行で印刷されたことが分かっている³⁵⁾。第2巻全体と第3巻の後半における周期的交替は、ある折丁では、外面の組版の左のページを言わば *cette* 派の植字工が、右のページを *ceste* 派の植字工が担当し、内面の組版はこの分担が左右逆で、次の折丁ではこれらの分担が前の折丁の逆だったことに由来すると考えられる。このような複数の植字工の分担によって、組み版順植字のスピードをさらに上げられる。実際、16世紀に、特に二つ折り判の挟み込み折丁で、この方法が採用されていた記録が残っている³⁶⁾。よって、印刷の前半にはかなり行き届いていたグルネによる綴り字 *cette* への訂正が、おそらく植字印刷ペースが速くなった後半には綴り字より重要な訂正を優先するためにできなくなったか断念されたと考えられるのである³⁷⁾。

このような1595年版に固有の印刷状況を反映する綴り字 *ceste* の出現箇所と、1635年版における綴り字 *ceste* の出現箇所がほぼ完全に一致していることは、1635年版の印刷原稿が1595年版の本だったことを明白かつ決定的に証拠立てている。無論、逆に、綴り字が大きく異なるからといって、違う本が原稿だったとは言えない。当時は、綴り字の選択が植字工の気紛れや恣意性に大きく左右されていて、同じ本が原稿でも、綴り字が異なることは珍しくなかったからである。たとえば、前節Ⅱで述べたように1600年版～1625年版は1598年版に直接・間接に由来しているが、それらのいずれにおいても、綴り字 *ceste* の分布には、1595年版と1635年版におけるような99%というほぼ完全な一致は見られない。また、第2版の1598年版が1595年版の本の一冊に基づいて植字されたことは確かだが、綴り字 *ceste* が大幅に *cette* に替えられ、*ceste* の総数は1595年版の499から132に減少している。これは、*ceste* ではなく *cette* にせよというモンテーニュの意思にグルネが従って、1595年版で訂正し残した *ceste* を、1598年版では *cette* に訂正するよう指示したからだと考えられる³⁸⁾。これに対し、1595年版と1635年版における綴り字 *ceste* の出現箇所の99%

の一致は、1635年版の原稿が1595年版の本の1冊だという決定的な証拠であるとともに、人生最後の「正確な訂正版」を望んだグルネが綴り字より重要な誤植訂正のほうを終始優先した結果、この綴り字に関しては植字工たちが原稿に機械的に従ったことを示していると言えよう。

グルネは40年も前の1595年版の本を1635年版の刊行のために原稿として使用したのである。無論、その本には、かつてグルネがパリとモンテーニュの城館で丹念に行った誤植訂正が記されていたはずである。1598年版には〈アントウエルペン本1〉などにおけるグルネの手書き訂正のおよそ4分の3が反映されているが、1635年版でもそれには少し劣るもののおよそ6割が反映されているからである。だが残念なことに、1635年版刊行のために使用された本には、『エッセー』の「正確な訂正」という強い願いと出版業者の販売戦略の一環として提示された印刷出版の交換条件との板挟みになったグルネが止むを得ず決断した、語や統辞法の変更も記されたのであるが。

おわりに

最後の〈グルネ版〉『エッセー』である1635年版が、語や統辞法の変更にもかかわらず、標題で「真の底本に基づいて正確に訂正された」と謳われ、グルネの序文において読者に最も推奨する1595年版の「実の妹」と呼ばれていることを巡って、グルネの証言とテキストの両面から〈グルネ版〉『エッセー』について本稿で行った考察から、次のことが言えるだろう。

まず、「真の底本に基づいて正確に訂正された」という標題の謳い文句は、グルネ自身によるものなのか、あるいは出版業者による宣伝文句なのか、いずれとも断定はできないが、少なくともこの版が他の〈グルネ版〉のテキストの誤りを訂正している点では、この言葉に偽りはない。それこそがグルネの人生最後の『エッセー』刊行の動機であり目的だったのである。そのためにグルネは、本稿における考察で明らかになったように、40年も昔の初版の1595年版に誤植訂正を書き込んだ本を原稿として使用することで、長年の間初期の版の誤植が訂正されないまま新たな誤植が増えていったテキストの原点回帰を図ろうとしたのである。もっとも、印刷出版業者の販売戦略に阻まれて、文字通りの原点回帰は叶わず、語と統辞法の変更を余儀なくされたのだが。

次に、1595年版の「実の妹」*« sa soeur germaine »*という呼称は、遺稿の翻刻後も誤植訂正を書き込んだ1595年版の本を1635年版の原稿として印刷に付した点では1595年版と同様だが、業者に強いられて止む無く語の近代化や統辞法の変更を行ったがゆえに、全てにおいて同様なわけではないことを示しているのではないだろうか。ただ、同じくグルネがあれほど努力して訂正を書き込んだ1595年版の本に基づいて印刷された1598年版が、なぜ1595年版と同等に推奨されていないのかという疑問がなお残る。これに関しては、1598年版にも誤植が少なからずあることが本稿で明らかになったことから、グルネは、1595年版では「全ての校正刷りを点検」し正誤表も作

成したが、1598年版ではそれらができなかったからではないかと推測される。しかし、これに関しては更なる調査検討が必要であろう。

最後に、夥しい数の誤りと改竄のある疑わしい異本という扱われ方から転じて、〈ボルドー本〉とは別でそれより後の遺稿の翻刻として徐々に再評価されつつある〈グルネ版〉『エッセー』であるが、グルネの〈義の父〉モンテーニュの著書『エッセー』の「正確な訂正」版刊行への信仰心に近いとさえ言える義務感と熱意が、かえってテキスト改竄の疑惑が払拭され得ない事態を生んでいるかもしれない。確かに、業者の販売戦略の一環であるテキストの部分的変更という条件を、誤植だらけになった『エッセー』の「正確な訂正」版をどうしても刊行したいという願いを叶えるために吞んでしまったグルネの苦渋の決断が、善意からとはいえやはり改竄をする人間なのだというグルネ観を依然として残すかもしれない。しかし、どのようにグルネが校正の労を執り誤植訂正にインクを費やしても、当時の印刷物から誤植を取り除くことがいかに困難だったかをわれわれは慮らねばならないだろう。グルネが〈長い序文〉で『エッセー』の分かりにくさを弁護し、1635年版の序文ではさらに、普通の植字工や校正者には理解できないモンテーニュ独特の文体が誤植の一因になっていると述べている³⁹⁾のであるなら尚更である。だが、不注意や誤読による誤植、および意図的な変更が持ち込まれる前のモンテーニュの最後の遺稿は失われてしまった。それでも、われわれに残された1595年版のテキスト、〈アントウェルペン本1〉などにグルネが書き込んだ訂正、1598年版のテキスト、そして語や統辞法の変更があることを十分考慮に入れたうえで1635年版のテキストを比較対照し、現存する〈ボルドー本〉も参照して、狭義・広義の誤まりを見極め除外することによって、モンテーニュの最後の失われたテキストの姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。

註

¹⁾ 九つの版が一般にグルネ版と呼ばれている。出版年が同じでも出版地や出版元や判型が異なる版があるのでそれらを併記する。1595年版（Paris, A. L'Angelier, in-folio）、1598年版（Paris, A. L'Angelier, in-8°）、1600年版（Paris, A. L'Angelier, in-8°）、1602年版（Paris, A. L'Angelier, in-8°）、1604年版（Paris, A. L'Angelier, in-8°）、1611年版（Paris, F. Gueffier, M. Nivelles, J. Petit-Pas, C. Rigaud, C. Sevestre, in-8°）、1617年版（Paris, J. Petit-Pas, C. Rigaud, F. Gueffier, M. Nivelles, C. Sevestre, V. D. Salis, in-4°）、1625年版（Paris, V. R. Dallin, F. Targa, R. Bertault, N. Bessin, R. Boutonné, M. Collet, E. Daubin, C. Hulpeau, T. de La Ruelle, G. Loyson, G. et A. Robinot, P. Rocolet, E. Saucié, in-4°）および1635年版（Paris, T. Du Bray, J. Camusat, in-folio）。

²⁾ Reinhold DEZEIMERIS, « Recherches sur la recension du texte posthume des *Essais* de

Montaigne », *Actes de l'Académie de Bordeaux*, 3^e série, XXVIII, Bordeaux, 1866, pp. 559-583 ; J. ZEITLIN, « The Relation of the Text of 1595 to that of the Bordeaux Copy », *The Essays of Montaigne*, New York, 1934-1936, I, pp. 421-434 ; D. MASKELL, « Quel est le dernier état authentique des *Essais* de Montaigne? », *BHR*, 40, 1978, pp. 85-103 ; Michel SIMONIN, « Aux origines de l'édition de 1595 », *Journal of Medieval and Renaissance Studies*, 25, 1995, pp. 313-343 ; *id.*, « Montaigne, son éditeur et le correcteur devant l'exemplaire de Bordeaux des *Essais* », *Le manuscrit littéraire : son statut, son histoire, du Moyen Age à nos jours*, A.D.I.R.E.L., « Travaux de littérature » n° XI, 1998, pp. 75-93 ; *id.*, « L'exemplaire et l'édition posthume », *BSAM*, 17-18, 2000, pp. 120-129 ; Michel MAGNIEN, « Juste Lipse et Pierre de Brach : regards croisés sur Montaigne », *Montaigne et Henri IV (1595-1995)*, Actes du colloque international. Textes réunis par Claude-Gilbert DUBOIS, Centre d'Etudes et de Recherches sur Montaigne et son Temps, 1996, pp. 125-149 ; Philippe DESAN, *Montaigne dans tous ses états*, Fasano, Schena Editore, 2001, pp. 69-232 ; Jean BALSAMO, « Le destin éditorial des *Essais* (1580-1598) », Montaigne, *Les Essais*, Edition établie par Jean BALSAMO, Michel MAGNIEN et Catherine MAGNIEN-SIMONIN, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, pp. XXXII-LV.

³⁾ 引用は *Le Corpus Montaigne*, édité par Claude BLUM, Champion/Bibliopolis S.A., 1998所収の *Les Essais*, 1635 [édition établie] から。以下〈グルネ版〉『エッセー』からの引用は全て *Le Corpus Montaigne* により、*Les Essais*, 1635のように示す。なお引用における下線は全て筆者。

⁴⁾ Pierre BONNET, « Le texte des *Essais* de Montaigne : évolution de sa structure des origines à nos jours », *BSAM*, 4^e série, n° 7, juillet-septembre 1966, pp. 72-73 ; R. A. SAYCE and D. MASKELL, *A descriptive Bibliography of Montaigne's Essais, 1580-1700*, London, The Bibliographical Society, 1983, p. 118.

⁵⁾ « Preface sur les *Essais* de Michel, Seigneur de Montaigne. Par sa fille d'alliance. », 1635, [10028-10031] ; Marie de GOURNAY, *Œuvres complètes*, édition critique par Jean-Claude ARNOULD, Evelyne BERRIOT, Claude BLUM, Anna Lia FRANCHETTI, Marie-Claire THOMINE et Valerie WORTH-STYLIANOU, sous la direction de Jean-Claude ARNOULD, Honoré Champion, 2002, pp. 335-339. グルネの序文からの引用は上記の *Le Corpus Montaigne* により、以下「*Préface* », 1635のように示し、GOURNAY, *Œuvres complètes* の該当ページを併記する。

⁶⁾ Philippe DESAN, « Marie de Gournay et le travail éditorial des *Essais* entre 1595 et 1635 : idéologie et stratégies textuelles », *Montaigne et Marie de Gournay*. Actes du colloque international de Duke 31 mars-1^{er} avril 1995 réunis et présentés par Marcel TETEL, Honoré Champion, 1997, p. 101.

- ⁷⁾ « Préface », 1635, [10009] ; GOURNAY, *Œuvres complètes*, tome I, pp. 337-338. なおこの一節の半分の長さへの短縮も1625年版からであるが、1635年版ではさらに若干の削除がされて、« certes aymée de moy plus que paternellement » (*Essais*, 1625, p. 593) が « certes aymée de moy paternellement » (*Essais*, 1635, p. 517) になった。
- ⁸⁾ 概略的ではあるが比較的詳しいものとして次の研究が挙げられる：P. BONNET, *op. cit.* ; R. A. SAYCE and D. MASKELL, *op. cit.* また、Claude BLUM, « Les Principes et la pratique : Marie de Gournay éditrice des *Essais* », *Marie de Gournay et l'édition de 1595 des Essais de Montaigne*, Actes du Colloque organisé par La Société Internationale des Amis de Montaigne les 9 et 10 juin 1995, en Sorbonne, éd. J.-C. ARNOULD, Paris, 1996, pp. 25-37は〈グルネ版〉9版の異同のI, 20とII, 17に関する統計調査などから、『エッセー』を守るという善意とグルネ自身の出世欲が入り混じった動機による意図的な改竄を結論付けた。
- ⁹⁾ « Préface », 1635, [10032] ; GOURNAY, *Œuvres complètes*, tome I, p. 341.
- ¹⁰⁾ Richard A. SAYCE, « L'édition des *Essais* de Montaigne de 1595 », *BHR*, 36 (1), 1974, p. 128.
- ¹¹⁾ グルネがモンテーニュの城館滞在中に参照した原稿に関しては、〈ボルドー本〉、〈ボルドー本〉より後の増補修正が書き込まれた別の遺稿、その写し、と、諸説ある。
- ¹²⁾ この時の訂正に従って印刷された第2版である1598年版の「読者へ」のテキストには、次のような注記が付されている：« Cette preface corrigee de la derniere main de l'Autheur, ayant esté esgaree en la premiere impression depuis sa mort, a n'aguere esté retrouvée. » (*Essais*, 1598, [10007])
- ¹³⁾ « Lettre de Marie de Gournay à Juste Lipse (15 novembre 1596) », GOURNAY, *Œuvres complètes*, tome II, pp. 1939-1940.
- ¹⁴⁾ « Lettre de Marie de Gournay à Juste Lipse (2 mai 1596) », *id., ibid.*, tome II, p. 1938 : « J'ai fait une préface sur ce livre-là, dont je me repens, tant à cause de ma foiblesse, mon enfantillage et l'incuriosité d'un esprit mallade, que par ce aussy que ces tenebres de douleur qui m'enveloppent l'ame ont semblé prendre plaisir à rendre à l'envi cette sienne conception si tenebreuse et obscure qu'on n'y peut rien entendre. Partant, si les imprimeurs de vostre pays vouloient d'aventure imprimer les nouveaux *Essais*, ne permettez nullement qu'ils y attachent cette piece, si je n'ay paravant eu loisir de la vous envoyer corrigée : »
- ¹⁵⁾ Cf. R. A. SAYCE, *op. cit.*, pp. 132-137 ; Günter ABEL, « Juste Lipse et Marie de Gournay. Autour de l'Exemplaire d'Anvers des *Essais* de Montaigne », *BHR*, 35, 1973, pp. 117-129.
- ¹⁶⁾ R. A. SAYCE, *op. cit.*, p. 132.
- ¹⁷⁾ « Préface », 1635, [10032] ; GOURNAY, *Œuvres complètes*, tome I, p. 340.
- ¹⁸⁾ « Quand aux fautes d'impression survenues au corps du Livre, la Damoiselle qui escrit cette

Preface prie le Lecteur de les excuser : estant tres-mariee que de miserables affaires, luy ayent osté pour ce coup le moyen d'y surveiller, & desirant passionnement que la fortune luy permette de le faire r'imprimer nettement encore une fois avant mourir : a quoy elle s'efforcera. » (*Les Essais*, 1625, [10050])

¹⁹⁾ « Privilège du Roy. », *Les Essais*, 1635, p. 872.

²⁰⁾ « A Monseigneur l'Eminentissime Cardinal, Duc de Richelieu. », *Les Essais*, 1635, [10003] ; GOURNAY, *Œuvres complètes*, tome I, p. 341.

²¹⁾ グルネは1635年版の序文で、一般に印刷出版業者が、費用を掛けずに儲けることを旨として、経費を抑えるために校正者を雇わないか、雇うとしても安く雇える者しか雇わないと述べている (« Préface », 1635, [10032])。

²²⁾ P. DESAN, *op. cit.* は、絶えずグルネがモンテーニュの意思を尊重したいという気持ちと、『エッセー』を刊行して世に広めたいという気持ちの板挟みになっており、業者はそれに付け入っていたと述べている。

²³⁾ Cf. R. A. SAYCE and D. MASKELL, *op. cit.*, pp. 36-112.

²⁴⁾ « Préface », 1635, [10029] ; GOURNAY, *Œuvres complètes*, tome I, p. 337 : « & ces clauses sans aucune mutation de sens, mais seulement pour leur oster certaine durté ou obscurité, qui sembloient naistre à l'adventure de quelque ancienne erreur d'impression, ou au pis aller de ce genereux mespris de telles nigeries, que leur Ouvrier affectoit. »

²⁵⁾ P. BONNET, *op. cit.*, p. 72 ; R. A. SAYCE and D. MASKELL, *op. cit.*, p. 38. なお、後者は « entreprises. » の後 « Et nous aduient ce que Thucydides dit des guerres ciuiles de son temps, qu' » が脱落していると記しているが、これは誤記。

²⁶⁾ ちなみに、2007年刊行の1595年版『エッセー』の校訂版である Pléiade 版では3人称複数形 « semblent » だが、2001年刊行の1595年版『エッセー』La Pochothèque 版は1595年版における « semblent » が誤植である旨注記して3人称単数形 « semble » にしている : MONTAIGNE, *Les Essais*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, p. 89 ; MONTAIGNE, *Les Essais*, Edition réalisée par Denis BJAÏ, Bénédicte BOUDOU, Jean CÉARD et Isabelle PANTIN, sous la direction de Jean CÉARD, Le Livre de Poche, « La Pochotèque », 2001, p. 134.

²⁷⁾ R. A. SAYCE and D. MASKELL, *op. cit.*, p. 29.

²⁸⁾ G. ABEL, *op. cit.*, p. 122 ; R. A. SAYCE, *op. cit.*, p. 134.

²⁹⁾ R. A. SAYCE and D. MASKELL, *op. cit.*, p. 119.

³⁰⁾ *Id.*, *ibid.*

³¹⁾ *Id.*, *ibid.*, pp. 119-120.

³²⁾ グルネの遺言書は4通が確認されている。最初の遺言書は1596年11月28日付け、2番目の

遺言書は1639年9月29日付け、3番目の遺言書は1642年9月3日付けである。最初の遺言書は Catherine MARTIN, « Le premier testament de Marie de Gournay », *BHR*, tome LXVII, n° 3, 2005, pp. 653-658に、第3、第4の遺言書は GOURNAY, *Œuvres complètes*, tome II, pp. 1945-1951および pp. 1952-1959に全文が収録されている。

³³⁾ GOURNAY, *Œuvres complètes*, tome II, p. 1957.

³⁴⁾ P. DESAN, *op. cit.*, pp. 99-101.

³⁵⁾ R. A. SAYCE, *op. cit.*, p. 118 ; R. A. SAYCE and D. MASKELL, *op. cit.*, p. 28 ; Jean BALSAMO et Michel SIMONIN, *Abel L'Angelier et Françoise de Louvain (1574-1620)*, Genève, Droz, 2002, p. 266.

³⁶⁾ Jeanne VEYRIN-FORRER, « Fabriquer un livre au XVI^e siècle », *Histoire de l'édition française*, sous la direction générale de H.-J. MARTIN et R. CHARTIER, tome I, Promodis, 1982, p. 289.

³⁷⁾ 奥村真理子「『エセー』1595年版に関する一考察 — 綴り字の側面から」『広島大学大学院文学研究科論集』第67巻、2007、pp. 75-92。

³⁸⁾ 奥村真理子「『エセー』1598年版に関する一考察 — 綴り字の側面から、1595年版との比較 —」『フランス文学』No. 27、日本フランス語フランス文学会中国・四国支部、2009、pp. 16-27。

³⁹⁾ « Préface », 1635, [10032] : « ce Livre est en verité d'une correction tres-particulierement difficile : dont la breveté du langage, & son bastiment aussi nouveau, qu'admirable, sont causes : en sorte qu'un compositeur & un correcteur ordinaire, y perdent leur Ourse. »

L'édition de 1635, ou la «sœur germaine» de l'édition de 1595 des *Essais* de Montaigne

Mariko OKUMURA

En 1635, Marie de Gournay, «fille d'alliance» de Montaigne, livrait au public sa dernière édition des *Essais*. Dans sa préface de 1635, elle recommande aux lecteurs les impressions de L'Angelier depuis la mort de l'auteur, «notamment» la première de 1595 et «celle-ci, sa sœur germaine». Certes, le frontispice la déclare «exactement corrigée selon le vray exemplaire», mais son texte est sensiblement modernisé et sa syntaxe assez modifiée, ce que l'éditrice a accepté contrainte et forcée par les imprimeurs et libraires désirant mieux vendre leurs livres. Cet article a pour objet de considérer cette contradiction sous deux aspects : les témoignages de M^{lle} de Gournay et le texte de cette édition. L'éditrice déplore à maintes reprises l'abondance des erreurs qui ont depuis longtemps détérioré cette œuvre. De fait, elle sollicitait depuis sept ou huit ans les imprimeurs et libraires, «sourds» à ses «précautions» qui «ne consistassent seulement, qu'à les obliger d'apporter à leur Ouvrage une juste correction». «Une juste correction», c'est le motif de M^{lle} de Gournay chargée du soin des *Essais* par Montaigne et ses proches. A sa demande, le privilège du roi favorisa sa «bonne intention» de «conserver» cet ouvrage «en la façon qu'il a esté composé par l'Authheur» ; l'éditrice de 69 ans, dans son épître dédicatoire au Cardinal de Richelieu, le supplia de «tenir lieu de Tuteur & de Protecteur» à «cet orphelin qui» lui «estoit commis» et de le protéger contre «le sacrilège» des «mains impures». La «fille d'alliance» a donc voulu la conservation des *Essais* tels que «son père» les a composés, néanmoins son désir passionné finit par être contourné. Or, notre confrontation des textes des neuf éditions dites de M^{lle} de Gournay ainsi que de l'Exemplaire de Bordeaux (EB) concernant les leçons entre l'édition de 1595 et l'édition de 1598 (I, 1-23) nous montre que, dans l'édition de 1635, la plupart des fautes d'impression des éditions de 1598-1625 sont corrigées conformément au texte de la première édition, de mêmes que des erreurs de cette dernière le sont aussi grâce aux efforts de l'éditrice. En outre, la répartition de la forme *ceste*, particulière à l'édition de 1595, réapparaît presque systématiquement dans l'édition de 1635. C'est une preuve évidente qu'au contraire des éditions de 1600-1625 reproduisant le texte précédent avec ses fautes d'impression, l'édition de 1635 a été imprimée sur un des exemplaires de 1595 dont l'éditrice s'était efforcée de corriger à la plume les erreurs 40 ans auparavant : sitôt après l'impression de 1595 à Paris par la collation avec la copie envoyée de la veuve de l'auteur, puis

au château de Montaigne par la confrontation avec le manuscrit original pour la deuxième édition de 1598. En 1635, cet exemplaire sous les yeux, elle s'est adonnée à la correction ; pourtant en même temps et à contrecœur, elle a remplacé des archaïsmes par leur forme rajeunie et changé de syntaxe pour une meilleure compréhensibilité. C'est pourquoi elle appelle l'édition de 1635 la «sœur germaine» de l'édition de 1595 : elles ne sont pas totalement identiques, bien que très proches l'une de l'autre. Le manuscrit original est perdu, mais il nous reste EB, probablement antérieur à celui-ci et cependant annoté de la main de Montaigne, les éditions de 1595, de 1598 et de 1635 ainsi que les corrections à la plume de M^{lle} de Gournay. Leur collation nous permettrait de remonter au texte du manuscrit original.